

4

家に対する常識から 解放される

toolbox

マイホーム

#### はじめに

ている。では、素足で触れる自宅のフローリングや部屋を覆っている壁紙は、自ら選択し たものだろうか。 身に着けている洋服や靴、スマホやカバンなど、これらはすべて自分で選んで手に入れ

もっと楽しく豊かになるはずだという信念が、僕らの活動を突き動かしている。 は生まれ 自分の家なのに、どこか他人任せにつくられてしまう日本の住宅への疑問からtoolbox た。 もっと住み手が主導権を握る家づくりを広めることができたら、 暮らしは

を体現している家を紹介したいと考えた。結果、 らが目指すべき家づくりのあり方を指し示してくれるものだった。 だけでなく、 この本の企画が持ち上がったとき、 欲求の根源になっている私的な価値観まで語ってくれた。 家に人柄が滲み出ているような、まさに住み手主道 11組の個性豊かな住み手が、暮らしぶり 彼らの言葉は、

2 10年に始まったtoolboxは、 世の中に数多ある内装建材やパーツ、 住宅設備の

え、誰もが選びとれるよう心掛けてきた。いまではお客様から家の写真が毎日のように届 材の理解や施工の専門性が必要な商品だが、 なかから、特徴を持った魅力あるものだけを集めて販売しているウェブサイトである。素 くようになり、 住み手主導の家づくりの広がりを感じている。 一つひとつに僕たちなりの感性で解説を加

と、その人に合った家のかたちというのはじつに様々で、住まいは本来自由であることに おしゃれな家とも違うし、 気付かされる。 かまいなし。完成した部屋の中で暮らす様子は誇らしげですらある。彼らの家を見ている toolboxの活動をしていると、時々「特殊な家」の情報が入ってくる。雑誌に出てくる 今回、 取材先として声をかけたのは、そんな「特殊な家」の住人たちであ 誰もが憧れる家とも言いがたい。 けれども住人はそんなことお

にとっての「家」は、生き方そのものを投影した映し鏡のようである。 き出る生活への欲求や意志に素直であろうとした結果が、家として表れているのだ。 いることがわかった。世間の常識や他人からの評価は関係ない。住人の内側から自然と湧 取材を進めていくと、一見風変わりに見えるそれらの家も、 必然の結果として生まれて

た人が多い。 この本に登場する住人たちは、 しかし彼らが語ってくれたことは、 家づくりが始まる随分と前から自分の家と向き合ってき 家づくりに長けた人に限った話ではな

3

を与えてくれる。 く、これから家について考えたいすべての人に、「自分らしい家をつくる」ためのヒント

ることを期待している。 のリミッターを外し、「マイホーム」がもたらす暮らしの可能性を大いに広げる一助とな 直に向き合い、自由に妄想するところから始めてみてほしい。この本が、あなたの想像力 分らしさが表れるとするなら、既成概念にとらわれる必要はない。自分の内なる欲求に素 あなたはどんな家に住みたいだろうか。身に着けている服や靴と同じように、家にも自

toolbox代表 荒川公良

toolbox アイテムカタログおわりに 馬場正尊	3 急ぐことをやめ 「間に合わせない」を選択 か完を手に入れる かっことをやめ 自宅ではない用途を加えることで、	マイホームをつくる 2 妄想の欲しいアイテム 3 みんなの参考書	り 自 体 が 目 的	7 撮影スタジオな家 6 移動できる移動しない家	5 引き継いだ家	蓄えられた家	3 生舌を削ぎ落とした家2 シェアオフィスを併設した家	1 自給自足な家	マイホームに暮らす	自由に生きるための家を探しに 馬場正尊	はじめに
178 174 166	162 158 154	122 88 56	136	124 108	90	72 5	58 42	22		8	2

# 自由に生きるための家を探しに

8

2020年以降のマイホームと、toolboxが描く未来の家。

### 馬場正尊

## toolbox ショールームの風景から

日々、 目白にあるtoolboxのショ 訪れる。 ールームには、 自分の空間をつくろうと思っている人々が

家や暮らしの風景を妄想しながら歩き回る。 ところ狭しと並べられた家の断片、 様々な大きさや種類のパーツのあいだを、まだ見ぬ

キッチン天板を取り囲み、ああでもないこうでもないと2人の位置取りを確認するカッ 小さなトグルスイッチを前にして、カチカチと手で持って遊び続ける人がいる。 大きな

るうちに、最初はぼんやりとしていた未来の家のイメージの解像度が少しずつ上がってゆ を具体化するためのちょっとした手助けをしている感覚。様々なパーツに手をふれてい ショールームにいるスタッフはその良き伴走者で、 プルもいる。toolboxのショールームは、家を妄想するための散歩道のようなものだ。 く。そのプロセスを見守っているのはとても楽しいらしい。 特別何かを勧めるわけでもなく、

いる。 り、例えばシステムキッチンひとつとっても、その機能は洗練された装置のように整って ある」という言葉で機能主義時代の家の姿を予想した。その後、 およそ100年前、 コルビュジエの夢は、すでに現実として極められた。 2世紀の巨匠建築家、ル・コルビュジエは「家は住むための機械で 家はすっかり便利にな

完全で、でもどこかしら妙に力の入った、ツッコミどころ満載のパーツたちで溢れている。 キッチンの前ではおそらく発生しない。そういえば、toolboxのショールームは、どこか不 その風景が、すごく幸せそうなのだ。この手のやりとりは、 ン天板だ。機械からは程遠い、素朴でぶっきらぼうなステンレスの板。脚すら付いていな いにしようか、 いっぽう、toolboxでもっとも人気のある商品のひとつが、シンプルなオーダー しかしそれを囲んで、人々は盛り上がる。誰がどこに立ち、大きさ、高さはどれぐら 足元の素材は何がいいか、すでに持っている鍋や皿と相性が良いか……。 機械のように完璧なシステム -キッチ

### 開放系」の家づくりへ

を得る。 集するために』、CCCメディアハウス)の序論に、僕はこのような文章を寄せている。 かもしれない。2013年に出版したtoolboxのコンセプトブック(『toolbox の人間がより深く関与できる開放系の何かへと大きく変わろうとしている、そんな気づき シ ョ ってくるようだ。 そんな時代の toolbox の役割は、 ル ームでのやりとりを通じて、いま人々が家に求めることが、 家のあり方が、 機械のようにブラックボックスの閉じた箱から、 誰もがそれを実現できる可能性を拡張すること 改めて浮かび上 家を編 個々

何に囲まれ、どんな空間のなかで自分の時間を過ごすのか。 切なことなのか、 住まいの編集権はつくり手から、住み手へと移行していくのではないか。 私たちは気が付いてしまった。 そして、それがどれほど大 (中略)

自分の読みたい本を、 空間や時間を編集する自由を、 見たい映画を、自ら選択するように、『toolbox』 私たちはつくり続けたい。 (抜粋) を通じて住む

る、それを普通のことにしたかった。 た空間に従属的に住むことから解放され、 この時のキーワードは「編集」だった。 イチからつくることはできなくても、 自分の暮らしを構成する風景を自分で編集す 与えられ

じることができている。 を通じて、住むことへの感受性や、生活を編集することへのニーズの高まりをリアルに感 toolboxを始めてから10年。その考え方はずいぶん定着してきた実感がある。 toolbox

ノウハウを解き明かすわけでもない。 考えてみる。この本では、 toolboxにとって2冊目となるこの本を制作しようと思ったきっかけについて、 自分たちの商品を紹介するわけでもなく、はたまた家づくりの ただ、 未来の家の姿を探求したいと思う。 改めて

望もある。そのどれもが家であり、環境と欲望が生み出したものだ。 『方丈記』の家はわずか四畳半といわれ、ゆく川の流れに身を任せ、すべてを捨て美しく生 民の家は持ち運べるパオだし、雨季に陸地が沈む水上生活者の家は船のように水に浮く。 きるためにあったが、 つの時代 ŧ 人間は環境や欲望に対し素直に家をつくってきた。 現代では高層ビルから資本を生み出す都市を眼下に見たいという欲 大地を旅する遊牧

では、これからの私たちはどんな家に住みたいのか。 ために必要な方法、 情報、 部材、 ツールをつくりたい toolbox はそれを知り たいし、 そ

## 東京R不動産から誕生したtoolbox

造民家とか、ビルの屋上に乗っかっている小屋とか、そんなものばかりだった。 普通の不 持った人間から見ればお宝のようなたまらない物件。 動産屋からは見向きもされないクレイジーなボロ屋だけれど、ある特定の指向性や目的を R不動産」(以下、R不動産)を始めたのは2003年のこと。 つけるハンターのような感覚で物件を探した。 いた物件は、 都 市の中に密かに眠る、 機械がまだ残っているボイラー室とか、 風変わりで味のある物件ばかりを集めた不動産サイト、 まるで都市の中で異形の生き物を見 大正時代に建てられた接道のない木 初期のR不動産に並んで 東京

ていた。そこから逸脱したいという気持ちが、このサイトを立ち上げた原動力だったのか で育っているが、ごく普通の生ぬるい常識のなかで生きていることに居心地の悪さも感じ もしれない。 R 不動 産の初期メンバーはほぼ全員、 典型的なサラリーマン家庭に生まれ、 マイ 朩

いった。 R不動産が少しずつ成長するのに並行して、中古物件のリノベーションが市民権を得て R不動産にはちょっと風変わりなお客さんがやってきて、 想像もしなかったよ

よりうれしかった。 うな使い方を編み出してくれたりもした。 住むことの選択肢を広げることができたのが何

空間ではなく、 しかし全部セルフビルドするのはハードルが高いし、デザイナーに依頼するには大げさ過 不動産で物件を借りたり購入したのだから、自分たちの手でデザインしたり改造したい。 くるきっかけとなった。 toolboxができたのは、そんなお客さんたちからの自然な要望からだった。 予算も限られている。こんな相談を数多く受けるようになっていた。与えられた 自分の空間を自ら編集したい人々の期待に応えよう。それがtoolboxをつ せっかくR

## 住むことの編集権を取り戻すために

ぎ落とされスッキリしているけれど、 品カタログは膨大に存在しているけれど、 カスタマイズできるもの。 toolboxに集められているプロダクトの共通点は、 自分たちが素直に欲しいと思えるものを探し、 素材の質感があり、 本当に欲しいと思えるものは少ない。無駄は削 率直であるということ。世の中に商 長さや高さを住まいに合わせて 時にはつくり、

それらを並べた。

デアにつながることも多かった。 たものも積極的に取り入れた。裸足ではトゲが刺さるかもしれない床材、 しれない棚受けやテーブルの脚など。 初期には選択肢の幅を示すために、これまでは欠陥と見なされていたような特徴を持っ その遊び心をお客さんも楽しんでくれ、 錆びが出るかも 新たなアイ

どうか曖昧になる日本独特のシステム。そのシステムが安全性や品質を担保している面も ことに改めて気づかされた。本体価格に工務店の取り分が上乗せされ、それが適正なのか 確かに、 ちがあった。 あるけれど、そのブラックボックスを解体し、 などプロを通すのが一般的で、エンドユーザーが直接購入するルート 驚いたのは、もっとも人気が出たのがフロ 住宅の中で大きな存在感を占めるにもかかわらず、それらを入手するには工務店 編集権を住み手側に委譲したいという気持 ーリングやシンプルなキッチンだったこと。 がほとんどなかった

### のマイホーム

なぜこの本のタイトルを「マイホ にしたのか。 そこには複雑な思いがある。



東京・目白にあるtoolboxのショールーム。 Photo: Masanori Kaneshita

気がついた。 でも同時に、それが僕らの暮らしの自由を束縛していたかもしれない、ということに最近 拠り所である、 まず、この言葉にはなんとも言えない懐かしい響きがある。そこには、 という核家族時代の常識が横たわっている。それが僕らを安心させる。 家が生活や家族

思う。 分が帰って行く場所という響きがある。「マイホーム」という単語は、その空気を帯びさ なわち造語である。英語では故郷のことを「My Home Town」と呼び、それにはどこか自 せたまま街を家に置き換えた、 この本をきっかけに、この魅惑的な「マイホーム」という言葉の意味を再定義したい じつは、マイホームという表現は英語にはない。 それはれっきとした和製英語、す 恐ろしく周到なコピーである。

る、シンプルで画期的な仕掛けとなった。 期の住宅ローンの仕組みとともに、マイホームは長期安定的に労働に固定することのでき 有名なフレー この単語が世の中に姿を現したのは1956年。 ズが経済白書に書かれた、そんな頃だった。ほぼ時を同じくして生まれ 金融政策であると同時に労働政策でもあったの 「もはや 『戦後』ではない」 ع た長 いう

きるかもしれないという可能性。 家を所有するという、少し前までは一部の特権階級に限られていた行為が、 それは庶民の所有欲を喚起する魔力を持っていた。 自分にもで 人々

は家とセットに、その中に収まる家電、車など、あらゆるものを所有したくなっていく。 その時代、マイホームを所有することには、 何かシンプルな目的に向かって走る共同幻

家が大量生産され、それが日本の住宅地の風景を形成していった。好むと好まざるとにか にやっきになった面もあったのではないか。結果、購入しやすいようパッケージ化された たいか、ということよりも、 想の快感があったのではないかと想像できる。 かわらず、それが僕らの原風景であり、「マイホームタウン」でもある。 「夢のマイホーム」を所有するという事実を手に入れるため いっぽうで、どんな街でどんな暮らしがし

### マイホーム幻想の崩壊

上離れても、 人々はマイホー 990年前後のバブル経済とともに住宅の価格は過度に高騰し、 普通のサラリーマンがそれを手に入れることが現実的ではなくなった頃か ムの幻想から徐々に覚め始めたように思う。 都心から1時間以

間半かけての通勤が始まっていた。 分がちゃんとしたマイホー ちょうどその頃、 僕自身も大学を出て社会人になり、 ムを持つイメージはどんどん失われていった。 混雑した電車と、くたくたに疲れた生活のなかで、 家族と住む郊外の家か なぜ長い時間を ら毎日1

のか。 疑わしく思えてくる。 けて通勤しなければならないのか。 一度、疑問を持ち始めると、いままでなんとなく信じていた既存の価値観すべてが なぜひとつの場所に縛り付けられなければならない

た。画一的に見える居住空間の奥底に一歩足を踏み入れてみれば、やはり コードやCDがうずたかく積まれた部屋、ファンシーなぬいぐるみに埋め尽くされた部屋 壊し始めた、まさにそのタイミングだった。狭いワンルームの室内に、床から天井までレ 様な生き物であったということが暴かれていた。 人間の生々しい内面や欲望がそのまま露出したような住空間を写し出した、都築響 『TOKYO STYLE』(京都書院、 偏りはありながらも好きなものに囲まれ居心地よく暮らす人々の姿がそこにはあっ 1993年)が出版されたのは、マイホーム幻想が崩 人間は率直で多

たのではないか。 経済的に見れば憂鬱な日々だったかもしれない。ただ、 かっていくことが許容され、支持され始めるスタートだったとも言える。 ク」のように、 ブル崩壊から現代までの期間は「失われた3年」と呼ばれることもある。 当初はどこか差別的なニュアンスを含んでいた言葉も、 ステレオタイプな価値観から逸脱し、 合理性の先にある欲求に素直に向 個々人の自由度は高くなっていっ いまではある分野 例えば「オタ たしかに

が、いまでは都市化し始めている。 に特化した知識や能力のある人間に対する敬意を込めた言葉として市民権を得てい への理解や共感が広がりつつある。 『TOKYO STYLE』でとらえられたような、 同時に、 個人の内的な趣味が存分に表現された世界観 小さなアパートの中で営まれていた価値観 る。

のなかで暮らす必然性なんてなくて、 てそれに気がつき始めた。 人間を社会に縛り付けるものではなく、 人々の志向は様々で、誰しもが内なる変態性を抱えているものだ。均質で平均的な世界 もっと欲望や本能に素直に暮らしたってい 個人の生き方や自由を表現するもの。 時代は改め

### マイホームの未来

具体的なイメージをつかむために、取材に出かけた。 のあり方を追求する人々をサポートする伴走者でありたいと思っている。 次の時代、 私たちはどのような家に住むのだろうか。toolboxは、 新しい「マイホーム」 この本ではその

住むことに対する自由を希求した結果、 取材を振り返ってみると、 通奏低音のようなものが流れていることに気がつく。 自然にたどり着いた風景であること。 いままでの それは

#### マイホームに 暮らす

自分に素直につくった家に住む、8つの家族。 どんな欲望が、その家をつくり上げたのか。 家というものに、何を求めているのか。 これからのマイホームのあり方を問いかける、 住み手たちの暮らしを訪ねました。 る選択の集積で成り立っていること。 常識から見ればちょっとちぐはぐだったり、 しい不自由が伴っていたりするけれど、それを楽しんでしまっていること。 だからどの住まいも押し付けがましさがなく、すが 特定の方向に振り切れてしまっていたり、著 自由意志によ

かにある。 私たちは一 度、マイホー ムの呪縛から解き放たれた。 私たちの家はどこまでも自由のな

スタンスは変わらない。 そんな時代のなかで、toolboxやR不動産はどのように家と付き合っていくのか。 いままでも、そしてこれからも、 基本

住むことの可能性を、誰かの住むことの選択肢を、

住むことの自由を、

拡張していくことに協力したい

に楽しみたいと思っている。 そして、 一人ひとりが自分にフィットした「マイホー ム」を追求するプロセスを、とも





の家を借りて、

住みながら自分たちの手で改装し

津市は西浦地区の海岸沿い

にある、

廃墟同然となっ

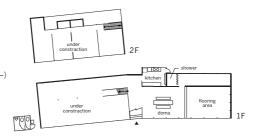
た

古いバスを改装したチル 2階はほぼ手付かず、 (過ごし処「The Old Bus」)を営業しながら暮らしています。 本佳奈子さん らすための環境をつくり 家の改装に励む傍ら、 伺ったのは、 まだまだ家づく 改装を始め 階の一部も廃材で埋め 続けてい から丸1年が の駐車場ス 経 尽くされているような つ た

廃業して10年以上経つという元海の家は、長いあいだ廃墟同然だった。そのため、破格の賃料で借りている。

#### > Data

家族構成 | 夫婦+ 大(うしいろ) + 鳥骨鶏(タメぴー&シナぴー) 所在地 | 静岡県沼津市 竣工年 | 不明 改修年 | 2018年 延床面積 | 276㎡ 敷地面積 | 419㎡







左 / 海の家時代からの残置物である廃材たち。建物全体の3分の2は、まだこの状態。 家づくりの材料や薪として活用している。 右 / もともとは横浜でバーとして営業していた、動かないバス。前オーナーから引継ぎ、沼津まで約100kmに及ぶ大移動をさせた。

27 Case 1 自給自足な家 26